



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

52

フランス名作集

中央公論社

世界の文学 52

©1966

フランス名作集

訳者 渡辺 一夫他

Illustrations:

Droits réservés A. D. A. G. P.; Paris,
S. P. A. D. E. M.; Paris,
Editions Gallimard; Paris.

昭和41年8月1日初版印刷

昭和41年8月10日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙、三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

メリメ

エトルリアの壺

ネルヴァル

魔法の手

ヴィリエ・ド・リラダン

栄光製造機

至上の愛

ドーデ

暴力行為

嘘をついていた女

106

97

84

68

31

7

A・フランス

アトレパテス人コム

フィリップ

ロメオとジュリエット

酔っぱらい

人殺し

シュランベルジェ

十八歳の眼

アポリネール

アムステルダムの水夫

オノレ・シュブラックの失踪

ラルボー

恋人よ、幸せな恋人よ

112

137

141

145

149

169

175

179

ジロドゥ

エゴイスト・ジャック

コクトー

山師トマ

シュペルヴィエル

海原の娘

オルフェ

ドリユ・ラ・ロシエル

空っぽのトランク

ベルナノス

影の対話

サン・テグジュペリ

南方郵便機

378

364

323

318

311

241

209

エーメ

小人

トリオレ

アンリ・カステラ

ヴェルコール

ヴェルダン印刷所

クールタード

占領

解説

586

570

546

472

457

フランス名作集

エトリリアの壺

メ リ メ
鳴 岩 宗 三 訳

オーギュスト・サン・クレールは、いわゆる社交界と呼ばれているところでは、いっこう好かれていなかった。主な理由は、自分自身の気に入る人々にしか取り入ろうとしなかったからである。ある者にはこちらから進んで付き合おうとするのに、ほかの者とはなるべく顔を合わさぬようにしていた。おまけに、ぼうつとしたのんきな男だ。ある夜、イタリア座から出がけに、A * * 侯爵夫人に、ゾンタク嬢の歌はいかがでしたかと聞かれた。サン・クレールは愛想よく笑いかけ、心でおよそ別のことを考えながら、「そのとおりです、奥さん」と答えた。こういうこつけない返事を、彼の内気のせいにするにはできない。というのも、身分の高い貴族や大人物や、今を時めく婦人に向かつてさえ、彼はまるで対等の者と

でも口をきくように、いかにも落ち着きはらって話をしていたからである。侯爵夫人はサン・クレールを不作法このうえないうぬぼれやと決めてしまった。

B * * 夫人がある月曜日に、彼を晚餐に招待した。夫人は何度も彼に話しかけた。夫人邸を出ると、彼はこのくらい愛想のいい女に出会ったことはいっぺんもないと明言した。B * * 夫人は、一月間よそで気のきいた言葉をかき集め、それを自分の家で一晩に使っていたのだ。

サン・クレールは同じ週の木曜日に、また夫人に会った。今度はすこし退屈した。そのつぎの訪問では、もう二度と夫人のサロンには顔出しすまいと腹をきめた。B * * 夫人はサン・クレールを、礼儀知らずな、たいそう行儀の悪い青年だと言いつらした。

彼は生まれつき心根の優しい、情の深い男であった。しかし、一生消えぬような印象をあまりにも受けやすい年ごろに、隠し立てのない彼の感受性は、友だち仲間の嘲笑を買ってしまった。彼は誇り高く、野心に燃えていた。それで、子供が世評を気にするように評判というものを気にした。このときから、彼は自分で不名誉な弱みと見なすようなことは、おくびにも出さぬように練習をつんだ。そして目的を達したが、彼の勝利は高くついた。優しすぎる心の感動は人に隠すことができたにしても、それを自分自身の胸ふかく秘めることで、百倍も激しく

感じなければならなかったのだ。社交界では、恋に無関心なのんきものという芳しからぬ評判を立てられた。それでいて、ひとりになると、彼の不安な想像力は、だれにもその秘密を打ち明けようとしないうだけに、ますます空恐ろしい苦痛を心にかきたてる。

友人を見つけるのがむずかしいというのはほんとうだ！

むずかしい！ いや、可能なことだろうか？ 互いに秘密を持たぬ二人の人間など、存在したことがあったろうか？ サン・クレールは、ほとんど友情というものを信用していない。これははた目にもわかることである。

社交界の青年たちに接する彼の態度は、冷やかで、控え目だ。いっぺんだって彼らの秘密を聞き出そうとしたことがない。しかも、彼のどんな考えも、その大部分の行動も、青年たちには謎であつた。元来フランス人には、好んで自分のことを話したがる癖がある。だから、サン・クレールも、心ならずもかずかずの打ち明け話を聞かされた。友人たち、といつてもこの言葉は週に二度顔を合わせる人たちをさすのだが、とにかく彼の友人連中は、自分らに対する彼の不信をこぼしていた。事実、こちらがたずねもしないのに秘密をもらす人間は、通常、こちらの秘密を聞けないと気を悪くする。秘密をもらす場合、当然、相互的でなければならないと、勝手に思い

こんでいるのである。

「あいつは顎まできつちりボタンをはめていやがる」と、ある日美男の騎兵隊長アルフォンス・ド・テミースが言った。「あのサン・クレールの野郎には、これっぽちも信用がおけん」

「おれは、少々、偽善者くさいとにらんでいる」とジュール・ランペールが続けた。「これは首をかけて誓つてもいいと言っている男の話だが、あいつがサン・シュルピス教会から出たところに二度も出くわしたそうだ。あいつが何を考えているか、だれにもわかりやしない。おれはといえば、あいつといっしょにいと、まったく勝手が違つてしまうんだよ」

彼らは別れた。アルフォンスは、イタリヤ大通りで、頭を垂れてだれにも目をくれずに歩いてくるサン・クレールに出会つた。アルフォンスは彼を呼びとめ、その腕をつかんで、平和通りへ出るまで、彼に**夫人との情事を逐一話して聞かせた。女の亭主はひどく嫉妬ぶかく、たいへんな乱暴者なのである。

その夜、ジュール・ランペールはエカルテ(トランプ遊)をやつて有り金をはたいた。そのあと踊りはじめた。踊りながら、そばの男を肘でこづいた。相手もまた持金を全部すつてしまい、ひどく不機嫌になつていた。それで、二、三激しい言葉の応酬があり、あらためてお目にかか

ろうということになった。ジュールはサン・クレールに介添を頼み、その機会に金まで借りたが、毎度のことながら金を返すことはきれいに忘れていた。

要するに、サン・クレールはかなり気さくに生きている男だった。彼の欠点で被害を受けるのは自分ひとりなのだ。親切で、たいていは愛想がよく、人にうるさがられるようなこともめつたになかった。広く旅行をし、本もたくさん読んでいたのに、たつて望まれないかぎり、その旅行や読書の話をしたことがない。そのうえ、長身で、なかなかの美男子である。顔の表情は上品で、才氣にあふれている。もっとも、いつも多少はまじめすぎるきらいがある。しかし、彼の笑顔はおおらかで、大いに愛敬があった。

私は重要な点を見落とすところだった。サン・クレールはどんなご婦人に対しても慇懃^{いんぎん}で、男との話より、彼女たちとの会話を好んで求めていた。恋しているのだからか？　そう言いきるのはむずかしい。ただ、このいかにも冷淡な男が恋を感じているとすれば、彼の意中の女性には美しいマチルド・ド・クルシー伯爵夫人をおいてないということ、周知の事実だった。それはうら若い未亡人で、彼はこの女のもとに足しげく通っている。ふたりの親密さに結論をつけようとして、人々はつぎのような揣摩^{そまつ}臆測^{おくそく}をたくましくした。第一に、伯爵夫人に対す

るサン・クレールの仰々しいまでの礼儀正しさ、またその逆。つぎに、人前でけつして夫人の名を口にしない彼の気取りよう。あるいは余儀なく夫人の話をする羽目になっても、すこしもほめたことがない点。それから、夫人に紹介されるまえのサン・クレールは熱烈に音楽を愛好し、伯爵夫人はそれに劣らず絵画に興味をもっていたのに、互いに知りあつてからは二人の趣味が変わってしまったこと。最後に、昨年、伯爵夫人が湯治に行くこと、彼女に六日遅れてサン・クレールも出発したこと。

*

物語作家としての義務から、私はつぎのことを公表しなければならぬ。七月のとある晩、日の出のすこしまえに、一軒の別荘の庭木戸が開き、そこからひとりの男が人に見つかりはしないかと恐れる泥棒みたいに用心しいしい出てきた。この別荘はド・クルシー夫人の所有物で、男はサン・クレールであった。外套に身を包んだ女が木戸まで彼を見送つて来た。そして、男が庭の塀に沿つた小道を降りて遠ざかつていくあいだ、木戸の外へ顔を突き出していつまでも男の後姿を見送ろうとした。サン・クレールは立ち止まり、用心ぶかい一瞥^{いちめく}をくれて、あたりをうかがつた。そして、手でその女になかへはいるように合図を送つた。ほのかな夏の夜の明かりで、同

じ所にじつとたたずむ女の白い顔が見わけられる。彼は引き返してきて女に近寄ると、両腕に優しく抱きしめた。女にはなかにはいるように勧めようと思うのに、言いたいことはまだ山ほど残っている。彼らの会話は十分もまえから続いていた。そのとき、野良仕事に出かける百姓の声が聞こえた。接吻が互いに取りかわされて、木戸がしまる。サン・クレールは一気に小道のはしに來ていた。

彼は、自分の知りぬいた道をたどるような氣持で歩きつづけた。あるときはほとんど喜びのあまりこおどりして、ステッキで灌木の茂みをたたきながら駆けだしたり、かと思うと、あるときは立ち止まるか、ゆっくり歩くかしながら、緋色に染まりはじめた東の空を仰ぎ見ていた。要するに、彼をながめていると、まるで檻を破って喜び勇む狂人のようだった。半時間ほど歩いてから、夏だけ借りることにしていた小さな軒家の戸口に來た。鍵は持っている。なかへはいった。それから、大きな長椅子に身を投げた。そして、その上で、じつと一点を凝視したまま、陶然たる微笑にきゅつと唇を曲げて、もの思いにふけるのだった。すっかり目をさましながら、夢を見ているような氣持だ。すると、彼の想像裡には、幸福の思いがしきりに浮かんでくる。（おれはなんと果報者だろう！）と彼はたえず心のなかで繰り返す。（やっと、おれの心を理解してくれる、あの心にめぐりあった！……

……そうだ、おれの見つけたのは理想の女性なのだ……おれの持っているのは、友だちであると同時に恋人なのだ……なんという氣立てだろう！……ほんとに情熱的な心の持主だ！……いや、おれのまえに、けつして男を愛したことなどなかったにちがいない……）こういう領域の問題にはきまつて虚栄心がしのびこむから、やがて彼は（あれはバリ随一の美人だ）と思った。そして、彼の想像力は女のありとあらゆる魅力をいっせいに描きだすのだった。（あの女は数ある男のなかからおれを選んだ。社交界の選り抜きばかりを崇拜者にしていたのに。ひどく美男で勇敢な、そうきざな奴でもない、あの輕騎兵連隊長、なかなかきれいな水彩画を描き、格言入りの喜劇を上手にやるあの若い作家、バルカンをその目で見、デ・イェビッチの麾下で軍人をやった、あのロシア生まれのラブレース、ことにカミーユ・T* *、あいつは確かに才人で堂々たる物腰をし、額には軍刀のみごとな傷痕をつけている……あの女はこういう連中が言い寄るのを、みんな柳に風と受け流したのだ。そして、このおれを！……）すると、おきまりの繰り返し句が口をついて出た。（おれはなんとという果報者だろう！　ほんとになんとという果報者だろう！）そうつぶやいて、彼は起き上がり窓をあけた。息がつけなくなったのだ。それから室内を行ったり来たりしていたが、ついで長椅子の上を転げまわ

った。

幸せな恋人は不幸な恋人と同じくらいやりきれないのである。私の友人で、よくこの二つの立場のいづれかに立たされたある男は、食事中は自分の情事を勝手に語れるというので私に極上の昼飯をおごってくれたが、そうする以外に自分の話を聞いてもらう方法を見いだせなかった。しかし、コーヒを飲みおわると、是が非でも話題を変えなければならなかった。

読者諸君にまんべんなく昼飯をおごるわけにもいかなので、サン・クレールのつもる恋の思いをここでお聞かせすることはやめておく。それに、人間はいつまでも雲のなかにとどまっているわけにもいかない。サン・クレールは疲れていた。で、あくびをして、両腕を伸ばして伸びをした。気づいてみると、夜はすっかり明けている。こうなつては、一眠りすることも考えなければいけない。その日は、顔見知りの何人もの青年といっしょに昼食兼用の晚餐会に招待されていた。目をさまして時計を見ると、かろうじて服を着てバりに駆けつける時間しかなかった。

*

シャンパン酒がもう一本抜かれたところだった。何本目であったかを決めるのは読者におまかせする。ここで

は、若者ばかり集まつた昼間の宴会では案外早く訪れる例の瞬間、つまりみんながいっせいにしゃべろうとし、頭のしつかりした連中が酒ぐせの悪い連中に対し不安をおぼえはじめる、例の瞬間にきていたということを知っていたただけで十分だろう。

「ロンドンみたいに、各自、自分の女のために乾杯する風習がバリでもはやっていたらいいのになあ」と、イギリスの話になるとけつしてその機会をのがさない、アルフォンス・ド・テミースが言った。「そうなると、われらの友サン・クレールがだれに思いを寄せているか、はつきりわかるだろうに」

こう言いながら、彼は自分のグラスとまわりの者のグラスになみなみとついだ。

サン・クレールはちよつとどぎまぎしたが、返事をする覚悟をきめた。しかし、ジュール・ランベールが彼より先に口をきった。

「おれはその習慣に大いに賛成だ。で、それを採用する」そう言つてグラスをあげると、「パリじゅうの婦人服裁断師諸嬢のために乾杯！　ただし、三十女と片目やびつこの女は例外とする」

「いいぞ！　いいぞ！」とイギリスびいきの青年たちが叫んだ。

サン・クレールは、グラスを手にして立ち上がった。

「皆さん、私はわれらの友ジュール君ほど、博愛なる心の持主ではありません。しかし、私の心はもつと志操堅固であります。ところで、この志操の堅さは、すでに久しきにわたって私が意中の婦人と別れているだけに、ますます賞讃に値いするのであります。さて、私の選択はみなさんのご賛同をいただけると確信しています。もつとも、諸君がまだ私の競争者となっておられないものとしての話です。みなさん、ジュディット・パスタのために乾杯！ 遠からずこのヨーロッパ第一の悲劇女優にふたたび相まみえることができますように！」

テミーヌはこの乾杯に、くちばしを入れようとした。しかし、拍手喝采のために彼の発言はさえぎられた。サンクレールはこのように相手の虚をつくことによって、今日のところは窮地を脱したという気がしていた。

話はまず芝居のことになった。芝居の検閲が橋渡しになって、政治論がたたかわされた。ウェリントン卿のことから、イギリス産の馬の話に移る。そしてイギリス産の馬の話から、一種の思考の連鎖作用で、また女の話にもどった。そうなるのも理解するにたかくない。というのは、若者たちにとっては、第一にりつばな馬、つぎに別嬪の恋人が、そのめざす最も望ましい二つの対象なのだから。

そこで、こんなに望ましい対象をいかなる手段で手に

入れるかが論じられた。馬は金で買えるし、女もまた買える。しかしそんな女のこととは触れないでおこう。サンクレールはこの微妙な問題を扱うにあたつて、自分のわずかな経験のことをほどほどに引き合いに出して、つぎのように話を結んだ。女にもてる第一の条件は、目立つた特徴をそなえること、他と異なるといふことだ。しかし、目立つた特徴の一般的公式があるかどうか？ 自分はあるとは思わない。

「すると、きみの意見では」とジュールが聞き返した。「びっこやせむしのほうが、背のまっすぐな世間並みの男より女に好かれやすいということになるのかい？」「きみの言うことは極端すぎるだろうが」とサンクレールは答えた。「しかし、必要とあれば、僕は自分の命題のあらゆる帰結を受け入れてもよい。たとえば、僕がせむしなら、脳天にピストルをぶち込んだりしないで、もつぱら征服につとめるだろう。まず、僕は二種類の女にしか言い寄らない。つまり、ほんとの感受性をそなえた女か、あるいは、数はこのほうが多いが、一風変わった女か、イギリスでよく言うエクセントリックな性格をもっているとうぬぼれている女かに。第一の型に対しては、僕の立場の恐ろしさ、僕に対する天帝の酷薄さを描いてみせるのだ。そして僕の運命に同情させるようにもっていき、うまく立ちまわって僕には熱烈な恋愛をする力が

あると思わせるようにする。決闘をやつて恋敵のひとりくらい殺すのもよからうし、それから阿片チンキを少量あおいで毒藥自殺をやるのもよからう。二、三ヵ月もたつと、僕の背こぶはもう向こうさまの目にははいらない。

そうなるに残つた問題は、相手がほろりとなる最初の機をうかがうことだけだ。奇抜をてらう女のほうは、征服なんていとも簡単だ。せむしは艶福^{えんぷく}を味わえないというのが確固不拔の原理だと信じこませるだけでいい。さっそく、彼女たちはやつきとなつてこの一般的原理を打ち破ろうとするだろう」

「恐るべきドン・ファンだ！」とジュールは叫んだ。

「諸君、不幸にしてせむしに生まれあわせなかつた以上」とボージュ大佐が言つた。「われわれは脚を折ろうではないか」

「おれは、サンリクレールの意見にまったく賛成だ」とエクトール・ロカンタンが口をはさんだ。彼は身長三尺五寸にも満たぬ小人である。「またとない別嬪で人氣の的になつてゐる女でも、男前のきみたちが頭から問題にしないような連中にまいてゐるのは、毎日見かけるかな」

「エクトール、立つてくれ、頼むよ。そして酒を持つてくるようにベルを押してくれ」とテミーヌがいかにもさりげなく言つた。

一寸法師は立ち上がった。そこでみんなは苦笑しながら、しつぽを切られた狐の話を思い出した。

「おれのことを言う」とテミーヌは話を引き取り、「この世で暮らせば暮らすだけ、ますます、かなりにふめる顔と（そう言いながら彼は同時に、目の前の鏡にひとりで悦に入つた一瞥を投げた）洗練された身なりが、どんなつれない女をも籠絡^{ろうらく}する大いなる特異性だということがわかつてきた」こう言つて、彼は襟の折り返しについたパン屑を爪先でぽんとはいた。

「なんだ、くだらない！」と一寸法師が叫んだ。「顔がきれいで服がスタウプ製なら、女はたと作れよう。一週間くらい手もとにおいて、二度目のあいびきにはうんざりしてしまふような女をね。愛されようと思つたら、別のものがある。いわゆる愛するということは……つまり必要とすることはだ……」

「おい、いいかね」とテミーヌが話の腰を折つて言つた。「ひとつ決定的な例を持ち出そうか？ みんなはマシニールを知つてゐるだろう。どんな男だったかということもご存じだ。イギリスの小姓みたいな物腰、奴の馬そっくりな話しぶり……しかし、奴はアドニスのように男前で、ブランメルみたいにネクタイを粹に結んでいた。要するに、おれの知るかぎりあんないやな奴はなかつたが」

「あいつには死ぬほど退屈な目にあわされたよ」とボー

ジュ大佐が言った。「考えてもみてくれ、わしはしよることなしにあいつと二百里の道を歩かされたんだから」「みんなも知っている、かわいそうなあのリシャル・トルトン、彼がもとで死んだという話だが」とサン・クレールがたずねた。

「しかし、それじゃ」とジュールが答えた。「あいつがフォンディ湖のほとりで追剥にやられたって噂を、きみは知らないのか？」

「もちろん知っている。しかし、マシニーが少なくとも事件の共犯者だったことは、いまに明らかになる。旅人が大勢いるなかにトルトンもまじっていたわけだが、彼らは追剥がこわいので、みんなでいっしょにナポリへ出ようということに決めていた。そこへマシニーもこの一団の仲間入りをしようとした。これを聞くやいなや、トルトンは一足先に発つたのだ。数日間マシニーと道連れになるのが、よっぽど恐ろしかったんだと思うね。で、彼はひとりで出発した。そのあととはご存じのとおりだ」「トルトンはそれでよかったんだよ」とテミースが言った。「二つの死に方で、穏やかなほうを選んだわけさ。彼のような立場におかれたら、だれでもそうするだろう」

それから、ちょっと間をおいて続けた。「だから、諸君はマシニーがこの地上でいちばんいやな

奴だったということを認めるね？」

「もちろんだ」とみんなは口をそろえて叫んだ。

「だれも失望させぬようにしようじゃないか」とジュールが提案した。「* *のために例外を設けよう。ことに、彼は政治上の計画を推進しているときだからな」

「諸君は、いまや」とテミースは続けた。「ド・クルシ―夫人がこよなき才媛であることも認めるだろうね」

一瞬、座はしーんとなった。サン・クレールは面を伏せていた。みんなの目が、自分にじっと注がれているような気がする。

「それを疑う者なんかいないだろう」と彼はやっと言ったが、相変わらず皿の上に頭を落としたまま、磁器に描かれた花模様をいかにも興味ありげにながめているような顔をしていた。

「おれはあくまで主張するね」とジュールは声をはりあげて言った。「あれはバリで最も愛すべき三女性のひとりだっていうことを」

「わしはあの女の亭主と知り合ってた」と大佐も言葉をはさんだ。「亭主は何度も奥さんのきれいな手紙を拝ましたもんだよ」

「オーギュスト」とエクトール・ロカンタンが話をさえた。夫人のところへ、おれを伯爵夫人に紹介してくれないか。夫人のところへ、きみのご威光はたいしたものだ